# 科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号: 1 1 3 0 1 研究種目: 挑戦的萌芽研究 研究期間: 2012~2013

課題番号: 24651130

研究課題名(和文)ハブ毒牙ナノ構造形成機構の解明と進化

研究課題名(英文) Biomineralization mechanism and evolution of nano-structured habu snake venom fang

#### 研究代表者

小川 智久(Ogawa, Tomohisa)

東北大学・生命科学研究科・准教授

研究者番号:80240901

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文):毒動物は、毒を効率的に注入する毒牙など毒器官をもつ。本研究では、毒牙バイオミネラリゼーション機構解明のため、ハブ毒牙形成に関わるマトリックスタンパク質の構造と特性を明らかにすることを目的とした。ハブ毒牙を50%蟻酸により脱灰し、8M尿素により抽出した。プロテオーム解析から等電点4~5、分子量25~55kDaの20種以上のタンパク質スポットを同定した。このうち主要成分としてI型コラーゲン様タンパク質の構造を明らかにした。さらにトランスクリプトーム解析から硬組織化関連タンパク質として,osteomodulin, IMPG2, dentin matrix protein 1などが見いだされた。

研究成果の概要(英文): Venomous animals have not only the venom-producing gland but also venome-injecting organs such as venom-loaded fangs and nematocyst for the efficient venome-injection to prey species. Alt hough it is considered that the venom fang have evolved functionally from teeth, their biomineralization m echanisms are still unknown.

In this study, to clarify the structure and properties of the matrix proteins from Protobothrops flavoviri dis (habu) snake venom fangs were analysed by combined proteomic and transcriptomics analyses. Venom-loaded fangs were calcified with 50% formic acid, and their proteins were extracted by 8M urea. 2D-PAGE showed the more than 20 protein spots with the isoelectric point ranging 4 to 5 and molecular weight of 25-55kDa including type I collagen as a major component. Furthermore, the biomineralization related p roteins such as osteomodulin, IMPG2, dentin matrix protein 1 etc. were identified from transcription products by RNA-seq analysis of fang-forming tissues.

研究分野: 複合新領域

科研費の分科・細目: ナノ・マイクロ科学, ナノ材料・ナノバイオサイエンス

キーワード: バイオミネラリゼーション 毒牙 ハブ マトリックスタンパク質 プロテオーム トランスクリプト

## 1.研究開始当初の背景

毒動物は、毒を生産する毒腺、毒嚢の他に毒を相手側に効率的に注入する毒牙や毒針、刺胞など毒器官が存在する。これら毒器官は、歯や産卵管、上皮細胞が機能的に進化してきたと考えられるが、毒牙形成のバイオミネラリゼーション機構など分子レベルでは明らかになっていない。

ハブ毒牙は、ほ乳類の歯と構造あるいは 消化液でもある毒に対する抵抗性など機能 特性にも違いが見られる。

### 2.研究の目的

本研究は、毒蛇ハブの毒牙形成に関わるマトリックスタンパク質およびその遺伝子の構造と発現様式、さらに牙の力学的特性と生化学的特性との相関を明らかにし、どのように機能進化したのかを明らかにすることを目的とする。

## 3.研究の方法

奄美大島産および徳之島産のハブ個体か **らハブ毒牙**(一匹当たり6~7本のスペア を含む2対(計12~14本)からなる) (図1)を解剖により取り出した。次に毒 牙を効率よく脱灰するための条件を 10%塩 酸および50%蟻酸などの酸とEDTAを用いて、 ,および室温( 20 さらに60 ,45 ,30 の温度で検討した。また、脱灰後の毒牙サ ンプルを8M 尿素溶液に溶解し,マトリッ クスタンパク質を抽出した。アセトン-トリ フロロ酢酸による沈殿(脱塩)の後, SDS-PAGE および2次元電気泳動により分離 した。また,抽出したマトリックスタンパ ク質をトリプシンによって酵素消化し MALDI Tof MS/MS 質量分析計により解析し

一方,ハブ毒牙形成に関わる組織からRNA を抽出し,polya RNA に精製後,Scriptseq v2 RNA-seq キット(Epicentre社)を用いて,イルミナ次世代シーケンサRNA-seq 解析用のライブラリを作成した。さらにイルミナ Mi Seq により,配列解析を行い国立遺伝学研究所の DDBJ パイプライン上の Trinity による de novo RNA-seq アセンブルと BLAST, SOAP によるマッピングを行った。



図1 ハブ毒腺組織(右上)とハブ毒牙

### 4. 研究成果

# (1)毒牙脱灰条件の探索

ハブ毒牙を 10%塩酸 50%蟻酸および EDTA を用いて、60 , 45 , 30 , および室温 (20 )でそれぞれ脱灰を試みた。その結果、EDTA ではほとんど脱灰されずに室温で72 時間(3日)以上かかった。10%塩酸および 50%蟻酸では、いずれも室温以上で脱灰がすすんだが、10%塩酸では毒牙全体が溶けマトリックスタンパク質の分解もみられた。一方、50%蟻酸では 60 でも分解せずに脱灰された。効率的な温和な条件として 50% 蟻酸 45 で 24 時間の反応を見いだした(図2)。

次に 50% 蟻酸により脱灰した毒牙サンプルを 8M 尿素溶液に溶解し抽出した。アセトン-トリクロロ酢酸によるタンパク質沈殿を行い,塩を除いたのち,SDS-ポリアクリルアミドゲル電気泳動(PAGE)および2次元電気泳動(2D-PAGE)を行った。図3に毒牙マトリックスタンパク質の SDS-PAGEの結果を示した。塩酸処理による脱灰操作では、マトリックスタンパク質が分解,低分子化することが判明した。一方,50%蟻酸2つていなかった。50%蟻酸,30 での脱灰条件が最適であることが判明した。



図 2 ハブ毒牙の 50% 蟻酸による脱灰 4~72 時間での違い

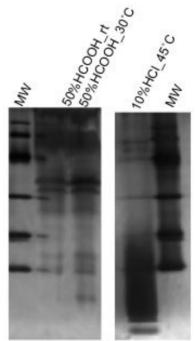


図3 10%塩酸および 50%蟻酸での脱灰操作後のハブ毒牙マトリックスタンパク質の SDS-PAGE による比較 MW:分子量マーカー

# (2)ハブ毒牙マトリックスタンパク質のプロテオーム解析

ハブ毒牙マトリックスタンパク質を二次元電気泳動(pl 3~11NL 等電点,12.5%)により分離した(図4)。プロテオーム解析の結果から等電点4~5を中心に、分子量25kDa,30kDa,35kDa,40kDa および55kDaの20種類以上のタンパク質スポットを同定した。このうち,30kDa,35kDa および55kDa は,連続したスポットで存在し,こをがい内でのトリプシン消化および V8 プレスタンパク質をトリプシン消化を行った。また、直接マトリックスタンパク質をトリプシン消化を行ったのおよび WS 解析を行った(図5)。その結果、配列力バー率

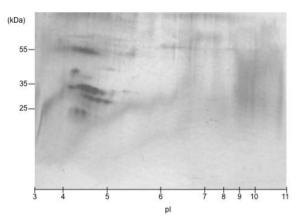


図4 ハブ毒牙マトリックスタンパク質の 2D-PAGE 解析

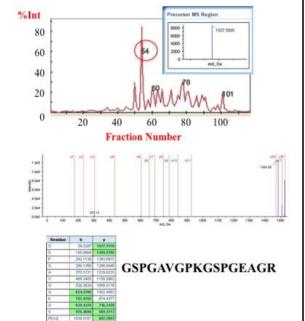
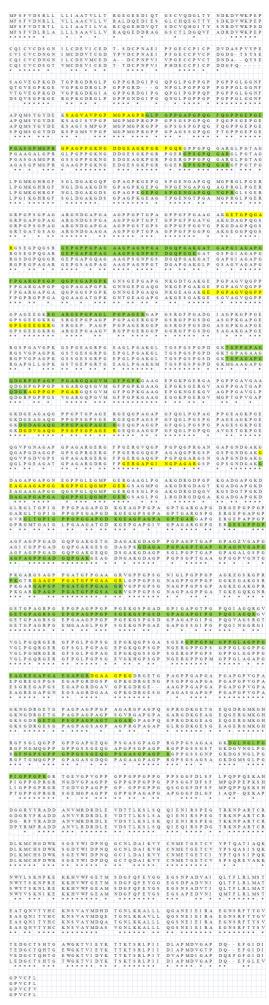


図 5 ハブ毒牙マトリックスタンパク質ト リプシン消化物の nan-LC 分離 (上)と MALDI\_Tof\_MS/MS 解析の一部

図 6 (右 ) コラーゲン様配列の同定 配列カバー率 32%



32%でハブ毒牙由来 I 型コラーゲン様タンパク質の部分構造を明らかにした(図6)

(3)ハブ毒牙形成組織のトランスクリプトーム解析

ハブ毒牙形成組織から RNA を抽出し、 polyA RNA としたのち ,RNA-seq 用ライブラ リーを作成した。1.3nM トランスクリプト -ム(RNA-seq)解析から、約1200の転 写産物が見いだした。このうち硬組織化関 連タンパク質として, osteomodul in, family, interleukin-1 interphotoreceptor matrix proteoglycan2 (IMPG2), dentin matrix protein 1, ADAMTS-like 3, protein collagen alpha-1(1), fibrillin 1 (FBN1), beta-actin, vimentin などが見いだされた。

# 5 . 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者 には下線)

## 〔雑誌論文〕(計 4件)

- 1) Watanabe Y., Chang Y.-H. Nakamura O., Naganuma T., <u>Ogawa T.</u>, Muramoto K. (2013) Rhamnose-binding lectins induce respiratory burst activity in macrophage cells from rainbow trout. *Fisheries Sci.*, 79, 513-519. DOI 10.1007/s12562-013-0624-7 査読有
- 2) Yamamoto, S., Tomiyama, M., Nemoto, R., Naganuma, T., <u>Ogawa, T.</u>, and Muramoto, K. (2013) Effects of Food Lectins on the Transport System of Human Intestinal Caco-2 Cell Monolayers. *Biosci. Biotech. Biochem.*, 77 (9) 1917-1924.http://dx.doi.org/10.1271/b bb.130367 查読有
- 3) Watanabe M., Nakamura O., Muramoto K., Ogawa T. (2012) Allosteric regulation of the carbohydrate-binding ability of a novel conger Eel galectin by D-mannoside (2012) *J. Biol. Chem.* 287: 31061-31072.D0I10.1074/jbc.M112.34621 3 香読有
- 4) Nakamura O., Watanabe M., <u>Ogawa T.</u>, Muramoto K., Ogawa K., Tsutsui S., Kamiya H (2012) Galectins in the

abdominal cavity of conger eel, Conger myriaster, participate in the cellular encapsulation of parasitic nematode by host cells *Fish Shellfish Immunol*. 33, 780-787.doi: 10.1016/j.fsi.2012.07.003. 查読有

## [学会発表](計 8件)

- 1)飛嶋 雄,村本光二,服部正策,大野素徳,小川智久,八ブ抗毒素フォーカスドプロテオミクスによるハブ毒筋壊死増強因子の解明 第86回日本生化学会 平成25年9月11日~13日横浜
- 2)安居宏実,速見卓也,村本光二,服部正策,大野素徳,<u>小川智久</u>,へビ毒筋壊死因子ホスホリパーゼA<sub>2</sub>の2つの機能部位を介した筋壊死発現機構第86回日本生化学会平成25年9月11日~13日 横浜
- 3) T. Ogawa, T. Naganuma, S. Sakaue, K. Liu, S. Sato, K. Muramoto, M. Osada, K. Yoshimi, Biomineralization of Pteria penguin pearl shell nacre regulated by matrix proteins homologous to the Jacalin-related lectin *via* their sugar binding abilities and phospholization International Symposium . Biomineralization (Biomin 12) 27 - 30 August 2013 Freiberg, Saxony/Germany 4)飛嶋 雄,村本光二,服部正策,大野素 徳,小川智久,ハブベノミクス:ハブ抗毒 素フォーカスドプロテオミクスによるハブ 毒筋壊死増強因子の解明第60回毒素シン ポジウム, 平成 25 年 7 月 17 日 (水) ~ 19
- 5)安居宏実,村本光二,大野素徳,小川智久、ヘビ毒筋壊死因子ホスホリパーゼ  $A_2$ のタンパク質工学による細胞毒性発現機構の解明,第60回毒素シンポジウム,平成25年7月17日(水) $\sim$ 19日(金)兵庫県宍粟市

日(金)兵庫県宍粟市

- 6) 小川智久, マベ真珠バイオミネラリゼーションの分子機構と機能性材料への応用2013 年度日本農芸化学会大会シンポジウム:48Y25 「バイオミネラリゼーション研究の新展開:ゲノム研究から融合マテリアル研究まで」平成25年3月27日,仙台7)小川智久,佐藤紗保,坂上静香,永沼孝子,村本光二,マベ真珠ジャカリン関連レクチンのバイオミネラリゼーション機能の解析:糖鎖およびリン酸化による制御第85回日本生化学会大会 平成24年12月14日~16日 福岡
- 8) <u>Ogawa T.</u>, Structurally and Functionally Diverse Lectins from Marine Resources. BIT's 2<sup>nd</sup> Annual World Congress of Marine Biotechnology Sept. 20-22, 2012, Dalian, China.

[図書](計 3件)

1) Ogawa, T. and Shirai, T. (in press) Tracing ancestral specificity of lectins: ancest ral reconstruction method as a new approach in protein engineering. In Lectins: Methods and Protocols. Methods in Moleculoar Biology (Ed by J. Hirabayashi) Humana Press ISSN: 1064-3745

2) Ogawa, T. and Shirai, T. (2013) Experimental molecular archeology: reconstruction of ancestral mutants and evolutionary history of proteins as a new approach in protein engineering. *In:* Protein Engineering -Technology and Application (Ed by T. Ogawa) InTech, ISBN 980-953-307-520-9, 111-131.

3) Watanabe, Y. Naganuma, T., <u>Ogawa, T.,</u> and Muramoto, K. (2013) Lectins of marine origin and their clinical applications. *In:* Antitumor potential and other emerging medicinal properties of natural compounds (Ed. by E.F. Fang and T.B. Ng) Springer, ISBN 978-94-007-6213-8, 33-54.

〔産業財産権〕 出願状況(計 0件)

名称: 発明者: 権利者: 種類: 番号: 出願年月日:

出願年月日: 国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称: 発明者: 権利者: 種類: 番号: 日日: 国内外の別: 〔その他〕 ホームページ等

6.研究組織

(1)研究代表者

小川 智久 (Ogawa, Tomohisa) 東北大学・大学院生命科学研究科・准教 授

研究者番号:80240901

(2)研究分担者

( )

研究者番号:

(3)連携研究者

( )

研究者番号: